

心ゆくまで味わう 法然さまの 『選択集』

大正大学教授
林田 康順



第16章
釈迦如来弥陀の名
号を以て慇懃に舎利
弗等に付属したまう
の文①

浄土宗で、第一の聖典、と位置づけられる書物『選択本願念仏集』（『選択集』）を
大正大学教授・林田康順先生が解説。

『阿弥陀経』における 釈尊によるお念仏の相伝

に怨みや憎しみの心を引き起こすこととなる。

【現代語訳】
釈尊が、阿弥陀仏の名号をとなえる（お念仏）を、舎利弗尊者をはじめとする弟子たちに浄土往生の行としてねんごろに相伝し、後世に遺すよう託されたことを明らかにする章です。『阿弥陀経』には、次のように述べられています。

「釈尊がこの経を説き終えられると、舎利弗尊者をはじめとする諸々の出家修行者や、この説法の座に連なつたすべての天人や人々、阿修羅などの聴衆は、釈尊の説かれた教えを聞いて大いに喜び、心から信じて拝受すると、釈尊に対して礼拝して、その場から立ち去つた」と。

善導大師の『法事讃』では、この経文を解釈して次のように述べられています。

「釈尊による説法が、今まさに終わろうとする時、釈尊はねんごろに阿弥陀仏の名号を浄土往生の行として相伝し、後世に遺すように舎利弗尊者に託された。劫濁（時代そのものが悪くなり、飢饉・疫病・戦争などが起こる）・見濁（邪悪な考え方がはびこる）・煩惱濁（煩惱が盛んにわき起こる）・衆生濁（人間の心身能力が低下し善が行われなくなる）・命濁（人間の寿命が短くなる）といった五つの汚れ（五濁）が増進する時代には、念仏往生に対して疑いを抱いたり、誘つたりする者が多く現れ、出家者も在家者も共に念仏の教えを嫌って、素直に耳を傾けようとはしない。彼らは、念仏をとなえる者を見ると腹立たしく思つたり敵意を抱いたりして、その実践を妨げて、信仰を止めさせようとするさまにたくらみを巡らせる。彼らは、われ先にと競いあつて、互い

味わい方

このコーナーでは、『選択集』の現代語訳と林田先生による「解説」を掲載しています。現代語訳部分は、**篇目**（章題）、**引文**（内容の根拠となる文章の提示）、**私釈**（引文に対する法然上人の解釈）で構成されています。

【林田先生の解説】
今号から、『選択集』の最終章である第16章に入ります。第13章以降は、『阿弥陀経』の内容に基づいて構成されており（阿弥陀経撮要）、第13章では、釈尊が、お念仏を多善根（多くの功徳をもたらす行）・諸行を少善根（少ない功徳しかもたらさない行）とお示しになっていること、第14章では、無数の諸仏が、念仏往生を真実であると証明されていること（証誠）、第15章では、同じく無数の諸仏が、念仏者を懇ろにお護りくださること（護念）を、それぞれ明らかにされました。

このようにお念仏の広大な利益を明らかにされた法然上人は、最終章の**篇目**に『阿弥陀経』で釈尊が、舎利弗尊者をはじめとする弟子たちにお念仏を相伝されたこと」を掲げ、『阿弥陀経』と『法事讃』の二節を**引文**に据えられます。しかし、この『阿弥陀経』末尾の一節からは、「釈尊がお念仏を相伝された」という内容を見いだすことはできません。

この点は、法然上人が『阿弥陀経』を解説した『阿弥陀経釈』の一節を以前に紹介した際（本紙、令和6年10月号）に述べた通りですが、『無量寿経』や『観無量寿経』と異なり、『阿弥陀経』にはお念仏による浄土往生のことしか説かれていないため、「弟子たちは、釈尊の教えを心から信じて拝受した」という経文によって、法然上人は「弟子たちは念仏を正しく相伝された」と受けとめられたのでしょう。

また、続く『法事讃』の一節において善導大師は、この『阿弥陀経』の文の意趣をくみ取り、「釈尊は懇ろに念仏を相伝された」と明言されています。ところで、古来、第16章の**私釈**は、他の章のような**引文**に対する解釈で

『阿弥陀経』の舞台 祇園精舎

コラム



インド・ウッタールプラデーシュ州にある祇園精舎の跡地。（写真提供：Hidewaki / PIXTA）

本章の引文である『阿弥陀経』は祇園精舎で説かれたとされます。この祇園精舎とは、古代インドのコーサラ国の首都である舎衛城から西南の地にあり、釈尊が多くの説法を行った精舎（僧院）です。

スタツタという長者が、コーサラ国のジェータ太子の所有する園林を、その土地すべてに黄金を敷き詰めることを条件に譲り受けて釈尊に寄進したという逸話に基づき、「ジェータ（祇陀）の園林に孤獨な貧者に施しをする者（給孤獨長者）の園（祇樹給孤獨園）」と名付けられました。現在は、サハート・マハートという遺跡内にあり、僧院跡やストウパ（仏塔）が散在しています。『平家物語』冒頭の有名な一節、「祇園精舎の鐘の聲」の「祇園精舎」はこの地を指しています。

はないという説があります。

浄土宗の第三祖・良忠上人は、「**引文**についてとりたてて解釈すべき箇所はないので、あえて**私釈**を施さなかった」（『選択集』）と述べられています。このお示しに基づいて、第16章の**引文**に続く**私釈**は、『選択集』全体の結論であると思われる「**私釈**を施さないのに**引文**を配当した理由を、「善導大師のすばらしい解釈を明らかにするため」「**決疑鈔直牒**」と述べられています。

さて、この**私釈**の冒頭において法然上人は、「浄土三部経」の最終的な帰結は、阿弥陀仏・釈尊・諸仏というすべての仏（三仏）が、浄土往生の行として、あらゆる諸行を選び捨て（**捨取**）、お念仏一行を選び取った（**選択**）という（**選択**）にあると指摘されます。上人は、ここで8種類の（**選択**）について挙げられるので、

これを（八種**選択**）と呼称しています。その第一であり、すべての（**選択**）の根本が（**選択本願**）です。すでに第3章において法然上人は『無量寿経』の異訳である『阿弥陀経』（平等覺経）に示される（**選択**）の語に注目し、都合14回も（**選択**）という語を用いて、阿弥陀仏によるお念仏と諸行の（**選択**）の経緯を論じられ、浄土に往生するための唯一の行として（**本願**）に定められた行こそ称名（念仏）ただ一行であることを明らかにされています。こうした（**選択本願**）のお念仏こそ、本書の題名にもなっている（**選択本願念仏**）に他ならないのです。



◎はやしだ こうじゅん
大正大学副学長・慶
岸寺（神奈川県）住職
法然浄土教、浄土宗
学が専門。「浄土宗の
常識」共著、朱鷺書房
「法然と極楽浄土」青
春新書ほか、著書・
論文など多数。